

# 軍記の描く本願寺と一揆

— 細川両家記・越州軍記・信長公記 —

塩谷菊美

## はじめに

「石山軍記」のイメージは、石山本願寺に結集した百姓たちが軍事の天才織田信長に立ち向かう軍記物、といったところだろうか。

確かに、いわゆる石山軍記、正しくは『石山軍鑑』（立耳軒作。明和八年・一七七一年の奥書を有する<sup>①</sup>）は、本願寺門徒を讀者・聴き手と想定して作られている。だが、百姓・町人への作者のまなざしは決して温かいものではない。百姓には枕詞のごとく愚痴・無智・愚昧などの語が付され、「百姓門徒等のみ寄集りたる小勢」「寄集りの下郎」「烏合の集り勢」といった侮蔑的な言葉が、織田方はもちろん本願寺家老下間仲成の台詞としても繰り返される。町人もまた「百姓・町人の分際として」町

人の身として」のように、武士の前で常に腰を屈しているべき存在とされる。

活躍するのはあくまでも武士たちで、百姓の活躍は限定的である。本願寺勢が信長の本陣を水没させる話では、百姓たちは軍師の命令に従ってわざと崩れ易い堤を築き、本願寺方の武士たちを案内する役回りにならない。堤を崩して川の水を引き込む見せ場は鈴木孫市ら武士たちの独擅場である（「本願寺門徒織田勢を欺く、并織田勢水難に苦む」）。

作者が百姓の戦いを褒め称えるのは、武士の指示に従って行う場合か、武士が動けない特殊な状況下での行動、あるいは百姓ながらに武士の心性を持つて行う、敵と一対一の命のやりとりなどである。軍記は武士が書いて武士が読む、軍事と治世の教科書であった<sup>②</sup>。『石山軍鑑』はその

伝統から出るものではない。

軍記に限らず、前近代の「書かれたもの」のほとんどに治者目線が運命づけられている。明和の物書きには、まだ百姓の立場でものを見る習慣が育っていないので、百姓が主たる読者（聴き手）になると承知している場合でも、愚かな百姓としか書かないが、実際に明和期の百姓がみな愚かだったわけではないだろう。

「書かれたもの」を読む現代人の側が、ときには意図的に作者と視線をずらして、「書かれたもの」の表現の裏側を読み取ろうとしなければ、治者目線を経た被治者の姿ばかりを見ることになる。いや、それ以前に、作者にとって興味のないことや、当たり前すぎることは書かれないものだから、存在さえ忘れがちになってしまう。

本稿はいわゆる石山合戦<sup>3</sup>と同じか直後の時期に作られた『細川両家記』『越州軍記』『信長公記』<sup>4</sup>の作者たちが、本願寺や本願寺門徒の一揆をどう見ていたか、検証しようとするものである。

## 一 細川両家記

### 一 揆といえは本願寺

『細川両家記』は、三好氏の被官である生島宗竹が六十九歳であった天文十九年（一五五〇）に前半部を、九十二歳の元龜四年（一五七三）

に後半部を記したとされるが、前半部に比べて後半部が疎略に過ぎ、別人の手で書き継がれた可能性も指摘されている<sup>5</sup>。

前半部では、享祿五年（一五三二）、細川晴元が敵対する相手を破るため「山科本願寺」に依頼して門徒を蜂起させるが、後には強大化した「一揆」に苦しめられ、六角氏や「京の法花衆」と協力して本願寺を陥落させる。しかし「一揆衆」はますます盛んに「おこり」、伊丹城を攻めようと「尼女まであつまり」堀を埋める有様で、今度は木沢長政が法華衆に協力を要請したという。

本書は「一揆衆」がどういう階層の人々か明言していないが、尼女も参加して堀を埋めたというから武士ではないのだろう。

本願寺門徒は御しきれない。利用するつもりでうっかり手を出すと、暴走されて痛い目に遭う。他宗の攻撃を受ければ臆するどころかさらに燃え上がり、女たちまで立ち上がってしまう。戦国武将のほとほと手を焼く様子が伝わってくる。

この部分は現代の歴史教科書では法華一揆と一向一揆の戦いとされるところだが、法華宗徒は一貫して「京中（の）法華衆」、本願寺門徒は単に「一揆」「一揆衆」である。一向衆・一向一揆衆などとは呼ばない。本書での軍勢の呼称は「阿波衆」「伊丹衆」のように「地名＋衆」の形が一般的で、仏教に関わる軍勢としては他に「南都僧坊衆」が一例のみ出るが、これは「地名＋衆」の一と見てよかろう。

各種の織田信長伝・徳川家康伝（およびこれらと重なる部分を持つ史

書)では、一揆といえは本願寺である。信長や家康が生涯に出会った一

揆の中で、最強の一揆が本願寺門徒の一揆(石山合戦・三河永祿一揆)であったということだろうが、信長伝・家康伝でない本書において、一揆といえは本願寺になっているのは注目に値する。

法華衆は京都以外にも存在するから「京中」と限定したのだろうか、「一揆衆」で地名が入るのは「中島の一揆衆」「河原村一揆衆」の二例だけで、あとはすべて「一揆衆」である。作者は「近国の門徒」「和泉・河内・津の国、三ヶ国の一揆」として、複数の地域から門徒集団が出勤したと認識しているが、「地名＋一揆衆」の形にしない。本願寺門徒は居住地によらず一括りにする。

三好元長が「一揆衆」に攻められ自害したという記事の後に「南無阿彌陀仏、穴賢々々」、「京の法華宗」が「山法師」に攻められて一千余人が死んだという記事の後に「南無妙法蓮華経也」と付加している。本書には戦死や自害の記事はいくらでもあるが、こうした文句を付加した箇所は他にはない。「一揆衆」と「京中法華衆」は阿彌陀信仰・法華信仰の徒として対になっている。

「南無阿彌陀仏」は本願寺門徒でなくても唱えるから、「穴賢々々」が本願寺門徒の表示の表示の表示である。これは『御文』の最後に付される「あなかしこく」であって、仏教用語ではない。經典はすべて仏説(仏の説いたこと)だが、本願寺門徒は人間の書いた手紙を聖典として崇め、拝礼する集団なのである。

## 前半部と後半部の差異

後半部に目を移すと、元龜元年(一五七〇)の記事に再び本願寺門徒が登場する。三好三人衆が野田・福島で信長と戦っていると、その次は「大坂」だとの風聞があったという。

「大坂」は本願寺を指す。『越州軍記』や『信長公記』も「本願寺」ではなく「大坂」とするから、本願寺は一般に「大坂」と呼ばれていたようである。延暦寺が「叡山」や「山」と呼ばれたようなものだろうか。「大坂」が寺内の鐘を撞いて門徒を召集したため、信長方は仰天したという。

九月十二日夜半に寺内の鐘撞せられ候へは、即人数集けり。信長方仰天也と云。

『信長公記』はこの「人数集まる」に相当するところを「一揆蜂起」とする。すでに編成されている武士団であれば鐘を撞いて集める必要はないから、「人数が集まる」は「一揆蜂起」と同じ実態を指すのだろうが、天文の錯乱の記事であればど用いた「一揆」「一揆衆」の語を、ここでは一度も用いていない。

その理由は前半部と後半部が別人の手になるためかもしれないが、天文の錯乱では本願寺門徒は敵の立場だから「一揆」を用い、野田・福島<sup>6</sup>の戦いでは味方の立場だからそれを避けたという可能性も排除できない。『越州軍記』や『信長公記』では「一揆」の語に軽侮の気分がま

わりついているからである。

## 二 越州軍記

「衆」と呼ばれない人々

『越州軍記』の作者は不詳で、天正五年（一五七七）の奥書がある。序文によれば、元龜四年（一五七三）八月の「越州の諸卒」の「討死」から朝倉義景の「傷害」、桂田長俊の「滅亡」、富田長繁の「死亡」、平泉寺壊滅という、「後代までの物語」となる四年間を描いたという。

本書は「一揆衆」でなく「一揆」か「一揆等」（いつきら）と呼び、「河北の一揆」「大野・南袋・北袋・七山家の一揆等」というように出身地名で表記する。

真宗でも三門徒は「一揆」と呼んでいない。府中の町人が「三門徒衆」に三千石の所領を約束して、「鯖江の坊主」が三千余騎、「横腰の坊主」が二千余騎を率いて発向すると、「一揆等」は蠅が追われるように逃げ去る（「富田与一揆合戦之事」）。本書を用いて作られた『朝倉始末記』では、「三門徒の衆々」や「高田門徒」が「一揆」（本願寺門徒）と戦ったとされるが、本書には高田門徒が登場しない。真宗他派に対する言及はこの三門徒への一例だけで、確実なことは言えないが、この一例から見るかぎり、『細川両家記』と同じく一揆といえは本願寺である。

「一揆」以外の集団には一般に「衆」を用いる。巨利平泉寺（白山越前馬場）の衆徒は「寺衆」「寺門衆」、本願寺門徒でも下間筑後守・同和泉守・杉浦法橋・七里三河守など、国外から入った「大将」を集団として捉えるときは「大将衆」、本覚寺・専修寺といった越前の本願寺派大坊は「大坊主衆」と呼ぶ。

「大将」「大坊主」には「衆」、「一揆」には「等」という接尾語の別は徹底している。「一揆」は富田を倒した後に内部分裂して「大将と、大坊主衆、一揆等、其内輪不和」となる（「従大坂越前守護職居置る事」）。「等」は中世には蔑称として使用されていた。「一揆」をおとしめる理由は示されないが、土民・百姓であるためなのは各所から読み取れる。「越前の大將筑後守」と「大坊主衆」が「国中在々所々の者ども」を発向させようとしても、「土民等」は、所領を手に入れて贅沢をしている人たちが戦えばよいと言って行こうとしない（「信長越前へ御入国之事」）。平泉寺の「随分の大名坊主達」は「土民」に鎌で首をはねられ（「平泉寺を一揆等攻落事」）、朝倉景鏡は「大凡下の奴原が手に懸らん事、無念なり」と嘆く（「式部大輔景鏡討死之事」）。「一揆」を構成するのは土民・百姓・凡下で、それゆえに蔑称と不可分なのである。

「一揆」の人数を数える際の助数詞には基本的に「騎」を用いる。何人と数えることもあるが、少数である<sup>8)</sup>。武器を帯し馬を馳せるのだから、丸腰の農民というより、武士と農民の中間に位置する地侍・土豪が多数含まれていたということだろうが、本書は彼らも土民・百姓の中に入れ

る。もつとも、作者の目は、鎌を携えた歩兵よりも武装した騎兵に向きがちであろうから、実際にほとんどが騎兵というわけではないかもしれない。

武士前々は雀の上の鷹の如し。今は猫の下の鼠の如し。率爾に声をも不立。昔の百姓下人は小袖を着て馬上にて通れば、主人襪褌を着し、自身鎧をかたげ、糧米をかづきつれて、腰をくゞめて歩行く。去ば、賤が貴服をきる、是を僭上と云ふ。僭上無礼は成国の凶賊と、孔安国が誠を不知けるこそうたてけれ。(中略) 武士共は云に不及、僧法師一寺住持も、其在所の道場坊主が弟子門徒となり、朝暮参詣せりと云云。(「富田与一揆合戦之事」)

百姓・下人が美服を着て馬上にふんぞり返る。武士はぼろを着て腰がかがめ、僧侶は道場坊主の弟子・門徒となる。「賤が貴服をきる」から「うたてけれ」までは『太平記』の千種忠顕(素行の悪い成り上がり者として造形される)への評の丸取りである。

『信長公記』が越前国は「一揆持」になったところを、本書は百姓・下人の僭上無礼ととらえた。道場坊主が他宗の僧侶を弟子としたというのも、「一揆」による信仰強制を批判したというのではなく、百姓である道場坊主<sup>9)</sup>が、武士に出自するであろう他宗の僧侶を弟子とする「僭上」を憎んだと解釈される。

伝統的な秩序を代表する知識といえは和歌である。作者は桂田・平泉寺と一揆を描き分けるのに歌ことばを用いた。桂田の出で立ちを「朝顔

の花色綴の鎧の巳の刻計に輝くを着、如露如電の甲に兎角の鋏形打、泡影夢幻の双の籠手」(「富田弥六桂田を退治之事」)、平泉寺の「院々谷々衆」を「初霜の巳の刻計に照光る三枚甲白紋の甲に、蟋蟀の角の鋏形打て、草葉の上の白露の嶺の嵐に一揉もまれたる如くなる臙当して」(平泉寺を一揆等攻落事)など、美しくもはかないものの象徴とされてきた朝顔や初霜や白露を並べ上げた。如露如電・兎角龜毛・泡影夢幻といった仏語由来の語が混じる点は、作者の出自を暗示する。

これらと対照的に「一揆」には一切の歌語を使用せず、「蜘蛛(蜘蛛)の網の甲を着、蚊虻の羽の大拳の旗をさし、蚯蚓の骨の桶皮綴の臙当に、鼠の角鋏形打たる、土籠の目のかゞやく計なる親重代の三尺七寸の太刀をはき」(平泉寺を一揆等攻落事)という調子である。蜘蛛の網の甲、蚊や虻の羽の旗というのも気味が悪いが、蚯蚓の骨、鼠の角、もぐらの目となると、大桑斎の言う「ありえないもの、魍魎魍魎」ということになり<sup>10)</sup>しかならない。

室町物語の『無明法性合戦状』では「真如の法王」と「無明の悪王」が合戦し、真如側は「上求菩提の胸当に、下化衆生の鞆を懸」、無明側は「迷惑不順の胸当に、無慙不信の鞆を懸け」などと表現される。戦物語には敵味方を出で立ちで描き分ける手法があった。作者はそれを知っていて、滅び行く旧勢力は伝統的な歌語で優美に、「一揆」は忌み嫌われる虫や動物の名を用い、人間でないものとして描き分けた。

桂田は主君の朝倉を裏切って信長に内通し、出世を勝ち取ったとして、

僧上を体现する人物として描かれてきたのに、本願寺門徒と戦う場面では一転してみやびな歌語で記される。

平泉寺は発掘調査で多数の舶来の陶磁器が出土し、文献上も妻帯僧の存在が記録されていて、盛んな経済活動や、地侍・土豪クラスとの深い関わりが想像されるが、本書には僧侶の妻子や百姓は登場しない。平泉寺にも大勢存在しながら作者の目に入らないような人々が、本願寺門徒の「一揆」では重要な役割を果たしていたはずである。

### 「一揆等」の信仰

桂田・富田滅亡した後、越前の国は大坊主衆・一揆等が進退すべしと思ふ処に、大坂より下間筑後守を越州の守護になし、杉浦法橋を大野の郡司とし、下間和泉守を足羽郡司と定、七里三河守は上郡府中辺を進退せり。一揆等には國中諸納所半損にして是を扶助とせらる、間、半国取る心なり。大坊主衆も知行を望と云へども、大坂より門徒の助力を以償ふべしと有ける間、武士・百姓等を弟子とし、我人衆とせり。(中略) 土民猶不足にして云様は、坊主達は後生をこそ頼まれたれ、下部の如く荷を持せ、或は下人の如く鐘をかたげさせ、召つかはる、事、一向不意得次第なり。桂田・富田を退治したる事も、国郡を進退せんと思ひ、我等粉骨を尽して此国を討取けるに、何も不知上方衆が下て、国を恣に致す事、所存の外なりと云

て、「(従大坂越前守護職居置る事)」

「大坊主衆」と「一揆等」は越前国を思い通りにするつもりでいたが、「大坂」によって「一揆等」は半国分相当、「大坊主衆」は武士・百姓らを「弟子」とすることで手を打たされる。「土民」らは「坊主達」の「下部」「下人」のように荷物持ちなどに召し使われることや、「上方衆」に利益を持って行かれることを怒り、彼らを討とうとする。本覚寺は先手を打って門徒らを討ち、寺の門には誰が詠んだのか、「弥陀のちかひ頼む坊主のかがり火は四十八より多く有らじな」(阿弥陀如来の四十八願を信じる坊主が焚く篝火は、四十八より多くはないだろう)という狂歌を書いた札が立てられる(「従大坂越前守護職居置る事」<sup>12)</sup>)。

本願寺門徒の信仰は阿弥陀信仰だが、この世に生きている特定の「坊主」の弟子となつて後生を頼み、その「坊主」への労働奉仕を伴うものであった。<sup>13)</sup> だからこそ「道場坊主」は他宗の僧侶を弟子にとり、「大坊主衆」は所領が得られなくても多くの弟子が得られればよしとしたのである。

師匠の命とあれば無謀な作戦でも敢行するさまに、作者が不気味さを表明する場面もある。「本覚寺の衆」が「坊主達の仰」だからと「命を塵芥より軽くして」攻め込み、切り一面が彼らの血で滝のようになって、朝倉方の武士たちは「気色替て欺きがたく」感じたというのである(「朝倉兵庫助が城落之事」)。

もつとも、「一揆等」が「○○寺の衆」の形で記された例はごく少ない。

大坊主殺害が企てられたほどだから、越前の大坊に命を捨てて帰依するタイプは多数派ではなかったであろう。そもそも〇〇寺の衆が〇〇寺の坊主に帰依するというだけであれば、各寺の坊主がそれぞれの門徒を率いる三門徒型の蜂起にしかならないが、本願寺門徒の「一揆」は、「大坂」が「大将」を派遣してくる前から地域名で登場していた。一揆の徒として注視されるのが本願寺門徒だけで、真宗門徒一般でないのは、地域的編成や一国規模での結集を可能にする、唯一の本山を持つか否かに帰するのであろう。

ただし、作者は「一揆等」に、本願寺に帰依するタイプと、越前の大坊に帰依するタイプの二類型があるとは捉えていない。大坊主襲撃のように突き詰めて考えなければならぬときは別として、平生はどちらへの帰依かを峻別しなかったということだろう。「一揆等」は本願寺の命令によって越前入りした下間筑後らも襲撃する（従大坂越前守護職居「置る事」）。大多数は「大坊主」のみならず「大坂」にも盲従せず、自らの意思で行動していたと作者は受け止めている。

### 真宗は「仏教」か

作者は信長称賛をこととしない。一揆壊滅後の残党狩りについて、羽柴秀吉・柴田勝家・明智光秀・丹羽長秀ら信長麾下の高名な武将たちの名を並べて、こう書いている。

軍記の描く本願寺と一揆

惣じて此勢押通るに、元来無体の兵どもなれば、民屋は沙汰に不及、神社仏閣焼払ひ、木草の一本もなかりけり。（諸勢山林を捜し一揆等誅罰之事）

十万もの大軍をなして焼尽・殺戮しつつ「押通る」織田勢も、「元来無体の兵ども」とする。僭上無礼を憎む人であれば、信長が越前まで版図に入れ、都で高位高官を得るのを厭うても不思議はない。

作者は「国家安全」「君臣水魚」であった朝倉治下の昔を慕いつつ、敗軍と滅亡の記録を積み重ねた後に、上下二巻のまとめとして「貴賤貧福前業による事」の一段を置いた。孔子・莊子は貧福貴賤を自然の所作とするが、「仏教」では前業によると考えるから、因果の理をわきまえずに悪念悪行にふけるのでなく、善根を積むべきであると長々と説いて、ようやく擱筆する。

作者は「仏教」の徒と自己規定しているらしい。なるほど、『五蘭盆経』引用の際に用いている「経に曰」は、僧侶以外はほとんど使わない言葉である。歌語を好み、狂歌を詠み、漢詩を作り、儒学用語を多用し、稚児たちの美を讚える。越前での出来事のいちいちに年月日や人名を明示できるほど、詳細で正確な資料を手に入れられる立場にあったのだから、僧侶ではあるが、修行一途、信仰一途ではなく、武家の間を周旋しつつ教養人・社交人として生きていた、室町時代風の僧侶ではなからうか。<sup>15</sup>

貧賤に生まれた者は貧賤のまま、恨まず嘆かず、己に可能な善根を積

むべきであると作者は考える。「仏教」は貴であり福である人々のものであった。土民・百姓が暴力をもつて旧秩序を破壊し、国外から押し入った武士たちに妻子を含めて虐殺されるころまで、子細に描き続けた末に、前世の因縁に逆らうのは「悪念」「悪行」だということに落ち着いてしまう。「仏教」徒である作者には、被治者が「福」を得たいという欲望を抱き、その達成のために集団行動を取るなど、およそ異世界の話なのである。

もつとも、百姓からみても旧来の「仏教」は異世界であろうと、作者は受けとめている。作者の用いる比喩はどちらかというとな陳腐だが、「一揆等」が平泉寺の「坊主ども」に「過分の所領」を取らせるのは無益だと言つて、「齒に血を付て」焼き討ちを主張した（「波多野玉泉坊傷害之事」）とは、野卑な笑い声まで聞こえてくるような見事な比喩である。

### 三 信長公記

#### 「一揆」への恐怖と軽侮

『信長公記』は太田牛一が信長上洛から本能寺の変までの十五年間の事跡を時系列を追って記録したのだが、顕如・教如の大坂退出をはじめとするいくつかの出来事に関しては、事前に別稿・草稿が作られていたと考えられている<sup>16</sup>。

本書には本願寺門徒の一揆とそうでない一揆（いわゆる伊賀惣国一揆や信州の芋川一揆など）の両方が登場するが、質・量ともに、前者に関する記述が後者をはるかに圧倒する。どちらも「一揆」と表現されることが多く、「一揆ども」もあるが少数である。

本書から生み出された『甫庵信長記』をはじめとする多くの信長伝では、蔑称を付した「一揆ども」「一揆ばら」、さらには「賊徒」「凶徒」「凶賊」などが用いられた。本書は基本的に蔑称を付さない点で特筆されるが、一揆蔑視は各所に窺われる。

元亀元年九月二十三日、信長が摂津から都へ戻ろうとすると「一揆」が蜂起して江口川の渡し船を隠し、「稻麻竹葦なんどの如く、過半竹鐘を持つて、江口川の向ひを大坂堤へ付きて叫喚」したが「異事なし」。十月二十日には江州の「大坂門家の者、一揆をおこし」、尾濃の通路を封鎖したが、これも「百姓などの儀に候間、物の数にて員ならず」。木下藤吉郎らが「一揆ども切り捨て」つつ、志賀の信長のもとへ駆けつけると、信長は城から眺めて、謀叛が起きたのではないかと案じていたが、藤吉郎らと知つて大いに喜び、陣内は戦意高揚した。だが、十一月十六日には信長が志賀から動けないのを見澄まして、長島で「一揆」が蜂起し、二十一日に織田彦七が「一揆の手にかゝり候ては御無念と思食し」自害したという。

本書でも「一揆」は「百姓」である。江口の渡では、「一揆」は稻麻竹葦（ぎっしり群がるさま）だが半数も武装していない、竹槍を握つて

喚き叫ぶだけだから何ということはないと書いた直後に、信長らが江口川を渡れたことを「奇特」と書いている。無事な渡河が神仏の恩恵と思われるほどの危機であったと感じているのである。江州の一揆も、「百姓」だから頭数が多いだけでどうということはないと記すそばから、望見して緊張感を高める信長や城兵に言及する。そしてついに信長の弟の信興が、一揆の手にかかるのを無念と思つて腹を切つたと記す。

信長讃頌のためには相手が強敵であったことを記録したいが、天下の信長が「百姓」を相手に真剣勝負をしたとは書きたくない。二つの気持ちの間で揺れながら、作者は矛盾した文章を綴り続ける。

なお、天草島原一揆（島原の乱）の際、一揆の徒が毎夜領主方の城壁の下にやって来て喚き立てたと、細川忠利が報告している。一揆の持つ槍はだいたい片刃で、中には小脇差を五寸回りほどの竹にはめ込み、藤で巻いて持っている者もいたという報告もある<sup>17</sup>。時代も場所も異なる二つの一揆で、類似の行動が報告されているということは、丸腰に近い大勢が頭数を頼んで威嚇の罵声を上げ続け、敵を精神的に追い詰めるという、一揆ならではの戦法があったと想像することも許されよう。

## 「一揆」と「大坂」の関係

『細川両家記』に本願寺が鐘を撞いたので人が集まったとある部分を、本書は

夜中に手を出し、ろうの岸・川口両所の御取出へ大坂より鉄炮を打ち入れ、一揆蜂起候と雖も、異なる子細なく候。（元龜元年九月十三日条）

とした。「大坂」が蜂起を命じたとはしていない。

他の箇所でも「江州にこれある大坂門家の者、一揆をおこし」（元龜元年十月二十日条）、「尾州河内長島より一揆蜂起候て」（元龜三年七月二十四日条）など、門徒の自主的蜂起に見える書き方が一般的である。天正十年三月十一日条には「大坂」開城後の「一揆」が記録され、自主的というより本願寺から自立しているようである。

だが、本願寺以外の者が主語となる場面では、自主的蜂起でないことを明記した例がいくつか見いだせる。「浅井備前、鯉江の城へ人数を入れ、市原の郷一揆を催し」（元龜元年五月十九日条）、「佐々木承禎父子、江州南郡所々一揆を催し」（同六月四日条）など、領主が領民に命じて「一揆」を起こさせる場面である。

また、本願寺門徒の「一揆」でも、「大坂」が「一揆」を蜂起させたとする二例がある。卷十三「天正八年庚辰八月二日 新門跡大坂退出の次第」の中の、「（頭如は）長袖の身ながら一揆蜂起せしめ」と「即時に一揆を催し」である。

まず、「長袖の身ながら一揆蜂起せしめ」は、前述の「夜中に手を出し」一揆蜂起候と雖も」と同じ「一揆」を指す。自主的な蜂起のように書いたところを、ここでは頭如が蜂起させたとしているのである。次に

「即時に一揆を催し」は、信長が天王寺に相城を構えようとしたのでなくさま「一揆」を催し、「天王寺へ差し懸け」て原田備中守など織田方の「歴々」を討ち取ったとする。「大坂」の的確な判断と「一揆」の即応体制が相俟って成果をあげたことを、誇り高く書き立てた一文である。実は卷十三の「新門跡大坂退出の次第」そのものが特殊なのである。文体からして本書の他の部分とまったく異なる美文である。近年の研究では、「新門跡」教如が大坂を退出してまもない天正八年のうちに、教如派の誰かが名文家の太田牛一にこの文章を誂え、牛一が後にそれを『信長公記』に使い回したと考えられている<sup>18)</sup>。

「新門跡大坂退出の次第」を少し細かく見ていこう。作者は冒頭で「大坂」受け取りの任に当たった勅使と、信長より加えられた使者の名を列記した後に、言葉を尽して在りし日の「大坂」を褒め称える。

抑も大坂は凡そ日本一の境地なり。其子細は、奈良・堺・京都に程近く、殊更、淀・鳥羽より大坂城戸口まで舟の通ひ直にして、四方に節所を抱へ、北は賀茂川・白川・桂川・淀・宇治川の大河の流れ幾重共なく、二里・三里の内、中津川・吹田川・江口川・神崎川引廻らし、東南は尼上が嵩・立田山・生駒山・飯盛山の遠山の景氣を見送り、麓は道明寺川・大和川の流に新ひらきの淵、立田の谷水流れ合ひ、大坂の腰まで三里・四里の間、江と川とつゞひて渺々と引さまはし、西は滄海漫々として、日本の地は申すに及ばず、唐土・高麗・南蛮の舟海上に出入り、五畿七道集りて売買利潤富貴の湊な

り。(傍線部と網掛けについては後述)

日本一の湊に「一流水上の御堂」が「こうこう」(煌々? 浩々?)と聳え立つ。巨大な寺院は天皇や公家や武家によって造られ、清らかに鎮もるものだが、この寺はそうではなかった。近国の門徒が「馳せ集まり」、はるばる加賀から「一流」仲間の城造りの職人を呼び寄せて造り上げた、下々の者たちの数の力で成り立つ寺であった。

その後、作者は水に縁のあるところで「一蓮托生」や「弘誓の船」といった仏語を持ち出し、「家門長久」の様子を歌い上げた。「水上の御堂」と「売買利潤富貴の湊」が一体化して、弘誓の舟も南蛮船も入り、賑やかに現世の隆盛を謳歌しているところへ、「天魔の所為」により「信長公」が野田・福島を攻撃した。顕如が「一揆」を蜂起させ信長を撤退させたが、そのときの遺恨か、五年前の夏に「当寺仏詣の輩」を妨害するに至ったという。

「大坂」が「一揆」を蜂起させたとする二つの例外的表現は、徹底抗戦を主張した教如派の意向を汲んだものであろう。本願寺が門徒に戦闘を命じてきた歴史を明記してほしいと依頼者が願うなら、その願いを活かすのが文筆業者の腕というものである。

当の本願寺が一揆蜂起を誇るのだから、「新門跡大坂退出の次第」以外の各巻でも、「大坂」が蜂起を命じたと書いて悪いはずはない。それなのに自主的な蜂起のように書き通したのは、作者が「大坂」と「一揆」の関係を、領主と領民の間に見られる命令と服従の関係とは異なる性格

と捉えていたということであろう。「大坂」が命じ、門徒が蜂起した場合でも、作者は門徒が自ら大坂の命に従い蜂起する道を選択したと考えたのである。

作者は百姓たちの寺と承知の上で「大坂」を「仏法」の範疇に入れ、「仏法繁昌の霊地」と呼んだ。『越州軍記』の作者のようにには本願寺門徒を人外の存在と見做さない。ただし、「だいうす門徒」の高山右近が「仏法繁昌すべき」道を進むため、人質を見殺しにしてまで織田方についてとするから（天正六年十一月九日条）、作者の「仏法」がキリシタンまで含む広いものであったことに留意が必要である<sup>19</sup>。

### 地方の大坊と本願寺

本書唯一の「本願寺」使用例は、天正二年七月十三日の長島陥落の場面にある。

これに依つて隣国の佞人・凶徒等相集り住宅し、当寺崇敬す。本願寺念仏修行の道理をば本とせず、学文無智の故、栄花に誇り、朝夕乱舞に日を暮し、俗儀を構へ、数ヶ所端城を拵へ、国方の儀を蔑如に持扱、御法度を背き、御国にて御折檻の輩をも能き隠家と抱へ置き、御領知方押領致すに依つて、

「当寺」は長島願証寺を指すと思われるが、この部分より前に願証寺は出ない。もともとの原稿には書いてあったが、編集・推敲の段階で誤っ

て消してしまったのであろう。相当に考え、練った末の文章なのである。その練られた文章によれば、長島では人々がもっぱら願証寺を崇敬し、「本願寺念仏修行の道理」をないがしろにした。学問がなく贅沢を好み、軍備を調べて領主の命令に従わず、罪人を隠し置き、土地を押領したという。

繁華な湊は人々に贅沢を提供する反面、静かな学問の雰囲気からは遠ざけるものである。「大坂」の繁栄をブラスイメージで描きながら、長島の門徒の無学や贅沢を批判するのは矛盾である。「大坂」は「一揆」を蜂起させ雄々しく戦ったと褒めるのに、長島では「佞人」「緩怠」「狼籍」と呼ぶのも矛盾である。本願寺の聖典である『五帖御文』に、王法を先として仏法は内心に秘めよ、守護・地頭を疎略にしてはならないと繰り返されるのは事実だが<sup>20</sup>、本山はこれを無視してよく、長島は聖典通りに振る舞えということにもならないだろう。

ここで長島の立地を説明した文章を、「新門跡大坂退出の次第」の大坂褒めの文章（前掲）と比べてみよう。

抑尾張国河内長島と申すは隠れなき節所なり。濃州より流出る川余多あり。若手川・大滝川・今洲川・真木田川・市の瀬川・くんぜ川・山口川・飛驒川・木曾川・養老の滝、此外山々の谷水の流れ末にて落合ひ、大河となつて、長島の東北西五里・三里の内、幾重共なく引廻し、南は海上漫々として、四方の節所申すは中々愚なり。

固有名詞を列挙し（河川名など＝網掛け部分）、まったく同じか、よ

く似た語句（傍線部）を用いて説明する。大坂と長島が似た地形であるというだけでなく、作者は長島を小大坂と見ていたのではないか。大坂に本願寺という核があったように、長島には願証寺という核があった。尾張や伊勢の門徒がこの寺を崇敬し、「本願寺」を軽んじた結果、信仰が歪んで悪がはびこったと作者は主張する。

これを書いている時点では、すでに「大坂」は塵芥となり、本願寺の脅威は去っていた。しかし、本願寺門徒が地方で独自に一揆を起し続けてしまうようでは、治者は安心できないから、本山以上に崇敬されていた地方大坊の記憶を美しく保つわけにはいかない。武士に膝を屈した本山には、唯一無二の本山となって貫わなければ困るのである。

#### 四 軍記の描いた「大坂」と「一揆」

石山合戦と同時代の軍記は本願寺門徒の一揆をどう見ていたか。

第一に、土民・百姓の自主的な蜂起だということである。

呉座勇一が強調するように、「一揆」の本来の意味は文字通り揆（道、方法）を一にすること、上下関係でなく平等な関係にある人々が一致団結することだから、自主性のもとより含意されているとしても、百姓に限定されるわけではない。実際に複数の軍記に登場する著名な一揆は、秀吉の九州征伐に伴う肥後国人一揆や梅北一揆、奥州仕置に伴う葛西大崎一揆や和賀一揆など、本願寺門徒でない領主層の一揆である。<sup>22)</sup>

軍記は武士が武士のために著す書物である。通常は武士に興味を集中させ、特別な理由がないかぎり、戦う百姓を描こうとはしない。特別な理由とは、たとえば延宝八年（一六八〇）の序文を有する『東国太平記』で、上杉遣民一揆の際に旧主を慕う「民百姓」が直江兼統に勧められ、「在々みな一揆を起し」たとあるように、智将が百姓を上手く煽動した事例として後学の参考になる場合などである。『石山軍鑑』で架空の軍師が門徒の百姓を手足のように使いこなして信長を苦しめるのも、これと同類であろう。

だが、『細川両家記』『越州軍記』『信長公記』の三書は、百姓の一揆に紙数を費やした。「一揆等」「一揆ども」と軽侮しながらも、詳細に記録すべきだと判断した、作者たちの強い危機感をまず読み取らねばならない。百姓の自主的な蜂起は、作者と同類である武士の蜂起と違って、丸腰同然であっても恐ろしいものである。

第二に、本願寺を信奉する阿弥陀信仰の徒の蜂起だということである。そんなことは当たり前だと思われるかもしれないが、戦う百姓の姿の書かれるのが例外的であるように、ある集団が特定の信仰を持つ者の集団として記されるのも極めて珍しい。『越州軍記』には平泉寺壊滅、『信長公記』には比叡山・根来寺の討伐や高野聖誅殺が記されるが、これらの寺の教義や信仰には触れられない。

平泉寺・比叡山・根来寺・高野山といった巨大寺院の本来的な職務は、仏教の力で治世を援けることである。治者（軍記の作者・読者）にとっ

ては靈験の有無が肝要で、教義は僧侶が知っていれば十分である。古来の聖教の焼失が重大事として記される場合も、聖教の名称や内容には関心が示されない。

それに対して、本願寺門徒が阿弥陀信仰の徒であることは、三つの軍記ともに記され、その信仰の特徴についてまで言及されている。阿弥陀信仰自体は各宗に見られるといっても、本願寺門徒のそれは阿弥陀信仰と端的に指摘できる阿弥陀信仰である。専修という言葉は使われていないけれども、外部の者にも阿弥陀信仰の徒であってそれ以外ではないと一目瞭然の者たちの一揆なのである。

彼らはまた阿弥陀如来を祀るならどこの寺でもよいのではなく、本願寺を唯一の本山とする。在所の大坊や道場に通っている者も、みな本願寺門徒としての自覚を持っており、それが地域別の編成や広域的な結集を可能にしている。

生身の人間に対する信仰が指摘されるのも、この集団の阿弥陀信仰の特徴である。『細川両家記』では書簡文を信奉する姿が注目され、『越州軍記』では門徒が坊主たちに後生を頼んだとされる。『信長公記』で長島の願証寺が尾張・伊勢の門徒に尊崇され、本願寺の教義を歪めているとされるのも、越前と同じ状態を指すのかもしれない。

師匠（善知識）を如来と観じて帰依する善知識信仰は、本願寺教団では阿弥陀如来の化身を本願寺住職に絞り込む形に再構成され、村上専精が夙に指摘したように、「法王神聖の観念」が教団を支えるようになって

ていく。<sup>23</sup>とはいえ実際には、江戸時代を通じて知識帰命（生きている師匠を如来と見て帰依すること）や一益法門（現世で仏になると考えること）の異義が問題にされ続けた。<sup>24</sup>

本願寺住職に限定されない幅広い生身仏信仰の存在は、江戸時代中期以降の石山軍記物にも窺うことができる。『石山軍鑑』では、織田勢に包囲された本願寺で、下間頼廉が「早く死て此趣きを極楽浄土へ進進し、仏の御加勢を願ひ、弥陀の利剣を授り、再び此土へ来つて、法敵信長を誅伐す可ぞ」と他の門徒を励ます（「紀州鷲の森本願寺合戦、并織田信長公御父子逆臣明智が為に御自害」）。享和元年（一八〇一）に刊行された秋里籬島作『絵本拾遺信長記』では、敗戦後、東本願寺造営のため山中から巨木を搬出する元本願寺軍師が「西方阿弥陀如来の化現」と呼ばれる（「東六条本願寺造立の事」）。これらの諸作には、如来の化身とされる本願寺住職と、彼を信仰する門徒たちという、信仰する者とされる者の二元的な関係が成立しているのだが、全体がそれ一色で塗り込められてはいないのである。

軍記作者たちの目に本願寺門徒の蜂起が自主的な蜂起と映った所以は、本願寺住職・大坊主・門徒が、煎じ詰めればみな同様に仏になる者であって、一介の門徒でも、やがては仏になって村や子孫を守るという確信を抱いていたことに求められるのではないかと想像している。

## おわりに

和歌や漢詩をたしなみ、文飾に満ちた文章を愛する『越州軍記』の作者は、貧賤に生まれたならそれを甘受すべきであると説いた。

貴顕に出自しない織田信長を讃える『信長公記』の作者も、百姓の一揆を軽んじてみせることを忘れなかった。

比叡山が焼き討ちされてもやむを得ない理由として牛一が挙げているのは、長島門徒への批判とはまったく別物である。

行体・行法、出家の作法にも拘らず、天下の嘲哂をも恥ぢず、天道の恐をも顧みず、姪乱、魚鳥服用せしめ、金銀賄に耽つて浅井・朝倉鼻負せしめ、『信長公記』元龜二年九月十二日条)

仏教とは持戒と学問なのである。肉食妻帯せず物欲を滅し、学問に励んで人々に尊敬され、強者・勝者に従順であるのが正しい仏者である。

『越州軍記』や『信長公記』の描く本願寺門徒は肉食妻帯で、所領を得るなどの欲望(物欲)にまみれ、阿弥陀如来のみを信じて学問がなく、嘲哂されても意に介さず、領主に向かって槍や鎌をふりかざす。軍記の作者たちがこれを正しい仏法と考えるわけがない。

江戸時代に作られた多くの軍記や、軍記に基づく史書においても、治者に従うべき存在であるはずの百姓が自らの意思を持ち、頭数を頼んで物欲充足のための行動をとること、そして本願寺がそうした百姓の寺であることへの拒絶反応は一貫して見られる。物欲よりも本山護持という

信仰上の意思を表に出す軍記の場合も、門徒の自主的な行動が忌々しく描き出されるものである。意思の中身よりも、百姓が意思を持つこと自体が問題視されるのである。

幕末に編まれた『徳川実紀』では、本願寺の一揆は「賊徒」「凶徒」「凶賊」「邪徒」である<sup>25)</sup>。また、幕末から明治・大正までの歴史教科書と言うほど広く読まれた頼山陽『日本外史』では、対立した相手は一般に「敵」と呼ばれるが、南北朝期の北朝方と本願寺門徒の一揆には「賊」が頻用される<sup>26)</sup>。幕府の正史と、維新の志士のバイブルとなった書物とが、本願寺に同じ視線を向けている。

被治者が自らの意思を持ち、行動する際のよりどころとした寺という本願寺の特異性を、治者たちは三百年の長きを経ても忘れようとしていない。物語史料によつて、個々の出来事が史実であったか否かを問うのは難しいが、作者個人や、作者の生きた時代の精神を読み取ることはできるのである。

### 使用テキスト

『細川両家記』：群書類従20、『越州軍記』：続群書類従22下、『信長公記』：角川文庫、『石山軍鑑』：編輯人不詳『絵本石山軍記』(明治17年鶴声社発行)、『絵本拾遺信長記』：早稲田大学図書館本、『無明法性合戦状』：室町時代物語大成13、『東国太平記』：通俗日本全史17。  
読者の便宜を考えて、引用の際には片仮名交じり文を平仮名交じり文に改め、濁点・句読点を私に付した。

## 注

- (1) 唱導台本の『石山軍記』を種本にして作られたため、もともと「石山軍記」と呼ばれることもあったようだが、明治十年代半ばに鶴声社が活版の絵入り本にして『絵本石山軍記』の名で売り出し、駸々堂など十指に余る出版社がこの名を踏襲したため、「石山軍記」の名で定着した。
- (2) 井上泰至『近世刊行軍書論』笠間書院、二〇一四年
- (3) 「石山」の語が同時代の語ではなく、江戸時代に入って新しく成立した語であることから、石山合戦と呼ぶべきでないとの議論があるが、これについては別稿としたい。
- (4) 本稿では太田牛一の著作と小瀬甫庵の著作の混乱を避けるため、前者を『信長公記』、後者を『甫庵信長記』と表記する。
- (5) 森田恭二『戦国期歴史細川氏の研究』和泉書院、一九九四年
- (6) 本願寺門徒の尊んでいる「手紙」が、かつて本願寺住職であった蓮如という人間の作であることを、『細川両家記』の作者が知っていたか否かは不明である。
- (7) 時代は降るが、安永九年（一七八〇）初演の歌舞伎『帰命曲輪文章』（並木五兵衛・並木十助作。『歌舞伎台帳集成』四十一巻所収）の第二帖では、「東山銀閣寺」（石山本願寺の変名）の重宝とされる「裏菊の判」が「人数を集むる御印文」「人数を集る廻文」と呼ばれている。一揆が厳禁された時代であるから、他に「一揆蜂起を暗示する語句やエピソードは一切ないが、人々を集める力こそ本願寺の重宝と観念されていたことを示すものである。なお、「裏菊の判」は江戸時代の西本願寺が菊花紋を用いていたところからの命名と思われる。
- (8) 後代には『織田軍記』（貞享二・一六八五年頃成立、元禄十五・一七〇二年刊）のように「〇人」とすることが多い。一揆は百姓だから歩兵と考えられるようになるのであろう。
- (9) 金龍静『蓮如』吉川弘文館、一九九七年
- (10) 『大系真宗史料』文書記録編 一向一揆 大桑斉「解説」
- (11) 下坂守「比叡山延暦寺と白山平泉寺」勝山市編『白山平泉寺』吉川弘文館、二〇一七年
- (12) 「世間のうわさ」「誰の作とも知れない歌」などと言いつつ自作を開陳するのは、この時期にはよく見られることである。この狂歌も実際に本覚寺の門前に立てられたのではなく、『越州軍記』作成時の作者の自作であろう。
- (13) 金龍静の言う「報謝行」（『一向一揆論』吉川弘文館、二〇〇四年）との関連も考えられよう。
- (14) 神田千里によれば、『越州軍記』の記述は信憑性が高いということである。「越州軍記」にみる越前一向一揆『東洋大学文学部紀要』史学科篇』四四、二〇一九年
- (15) 今泉淑夫『亀泉集証』吉川弘文館、二〇一二年
- (16) 金子拓「太田牛一自筆『太田牛一旧記』について」金子拓編『織田信長という歴史―『信長記』の彼方へ』勉誠出版、二〇〇九年
- (17) 鶴田倉造編『原史料で綴る天草島原の乱』本渡市、一九九四年、No. 0314・No. 1161史料
- (18) 前掲注16金子論文。川端泰幸「教如と織豊武士団」『真宗研究』六〇、二〇一六年
- (19) 太田牛一ならずともキリシタンの信仰を「仏法」と表現することは多い。『原史料で綴る天草島原の乱』参照。
- (20) 神田千里「一向一揆と石山合戦」吉川弘文館、二〇〇七年
- (21) 呉座勇一「一揆の原理」筑摩書房、二〇一五年
- (22) 『群書類従』二十輯、『続群書類従』二十一―二十三輯、『通俗日本全史』六―二十巻を参照した。
- (23) 村上専精『真宗全史』丙午出版社、一九一六年
- (24) 拙稿「歎異抄」はなぜ「親鸞の言葉の記録」として疑われなかったか―文字による学びと教義の確立―『民衆史研究』八六、二〇一三年
- (25) 『徳川実紀』経済雑誌社、一九〇四年
- (26) 『日本外史』岩波文庫、一九七七年

